

令和5年度 学校自己評価及び学校関係者評価表

武蔵村山市立雷塚小学校

経営理念	知性、徳性、体力、気力を育み、自分も他者も大切に、互いに気遣いができる人間性豊かな児童の育成を図る。			自己評価		学校関係者評価					
	経営目標 (中期・短期を明記)	目標達成のための方策	評価指標	7月 達成値	11月 達成値	分析コメント(学校関係者評価委員会の意見、児童・生徒評価、保護者評価等の意見について、参考にする。)	改善策(来年度の目標設定、具体記取組目標)	意見	評価点 (4点満点)		
確かな学力の向上	誰一人として取り残さない、全ての児童に対する基礎的・基本的学力の定着(中期)	①朝モジュール、放課後学習教室(雷塾)の時間等において、東京ベーシックドリル等を活用して算数の定着に課題が見られた単元を集中的に学習指導・支援を行う。 ②「雷塚スタンダード」により学習ルールを徹底し、児童の学びに向かう姿勢を育成する。	①東京ベーシックドリル診断シート及びワークテストにより達成率7割を超える人数で評価する。	80	58.9	76.8	B	授業時での復習プリントの取組や放課後学習教室(雷塾)など継続的に取り組んだことで、少しずつ学習の定着が見られるようになってきた。3学期にも東京ベーシックドリル診断シートの結果を受け、課題点を重点的にどう取り組み、学力向上につなげるかを検討する必要がある。	さらなる学力の定着を図るために、放課後学習教室(雷塾)の取組やライнс「eライブラリ」、東京ベーシックドリルなどの継続的な取組だけでなく、今年度作成した「雷塚スタンダード」を周知・徹底させ、学習に向かう態度を十分に育てていく。	雷塾など新しいことを取り入れて、年間を通して取り組むことはとてもいいことだと思う。勉強が苦手な子供たちに対して、補う時間があるよかったと思う。次年度以降も継続的に行ってほしい。	4
	分かる授業への改善(短期)	①「授業改善推進プラン」による児童の実態に則した授業改善。 ②1単位時間の授業における指導と目標・指導・評価の一体化を基盤とした見直し、検討により、児童に力が付く授業づくりを図る。 ③学期に1回以上の授業観察の実施により、授業改善について指導・助言を行う。	自己申告等の授業観察及び児童への授業後のアンケートにより、授業の内容の理解度を図る。理解している児童が被授業者の9割を超えるか評価。	80	62.9	78.0	A	「授業改善推進プラン」による国語と算数の課題に対して、具体的に示した手立てに取り組んだことで各学年の課題点が改善されつつあるが、まだ課題は残っている。ICT機器を活用した授業や話し合い活動を取り入れた授業など、各教科において児童の学習意欲を引き出す工夫はしている。	児童一人一人が「できた、分かった」と思える授業づくりのために、教師は不断の授業改善に取り組むことが大切である。そのために、校内研修や外部の研修会などを活用して、教師の授業力を向上させる。	若手教員が多い中で、授業観察や授業づくりの工夫など校内研修をたくさん行っていくことで、授業が改善されていくと感じた。子供たちのことを考えて、授業を工夫して、一人一人が分かるまで教えていただいている。	4
	主体的・対話的で深い学びの実現(中期)	①GIGA端末を利用した自主学習や放課後等を利用した補習学習の実施により「指導の個別化」を図る。 ②協働的な学びの中において、児童が一人一人に応じた学習課題等に取り組む機会を提供することで「学習の個性化」を図る。	授業観察において、ほぼ100%の児童が主体的な学習活動を行っているか。	80	63.5	75.7	B	書くことが苦手な児童にノートではなく、タブレットPC上に打ち込むなど、児童の実態によってタブレットPCを有効活用して学習課題に取り組むことができた。また、各教科においてグループ学習などの協働的な学びの場面も多くみることができた。	児童が主体的に学習に取り組めるように、教員が引き続き児童の実態をしっかりと把握し、その児童にあった指導法を考え、提供していくことが大切である。また、グループでの話し合いだけでなく、ICT機器を活用した協働的な学びの取り入れていく。	グループ活動が楽しいと言っている子供たちがいて、雷塚小の教員は、日々の授業づくりに邁進されていて感心している。 子供たちの学習の中で、タブレットPCの活用が充実していてとてもよかった。	4
豊かな心の育成	人権教育の推進(中期)	①人権教育を通じて育てたい資質・能力を育成するために、各学年の人権教育年間指導計画を見直し、知識的側面、価値的・態度的側面及び技能的側面に関する取組を各教科等において意図的・組織的・計画的に実践させる。	学校評価により、重点化した児童の資質・能力の向上を評価	80	63.3	76.36	B	校内研究を通して、人権教育における知識的側面、価値的・態度的側面及び技能的側面に関する取組を各教科等において意図的・組織的・計画的に行うことができた。その結果、各学年で人権にかかわる指導の具体的な方法を学校全体で共有することができた。	今年度の研究の成果を基に、さらに人権教育年間指導計画の見直しを行い、人権教育の充実を図っていく。児童の一番の環境である教員の人権感覚を磨くために、校内研修を実施し、教職員の人権感覚を磨いていく。	話し合い活動では、否定するのではなく、互いを認め合いながら、互いに意見を交換できる様子がうかがえた。また、活動においては互いのいいところを認め、互いを尊重できていた。	4
	自己肯定感や思いやりの心の育成(中期)	①教育目標の「思いやりの子」を重点目標とすること及び人権教育を推進することを教職員、保護者及び地域に対して、保護者会、学校だより、学校運営協議会等を通して周知する。道徳教育を通じた人権教育の研究を進め、自分も人も大切にすることを人権感覚を養う。 ②互いを認め合う活動をあらゆる教育活動に取り入れる。	人権教育アンケートにより、自己肯定感における項目での7割が肯定的になること	80	65.2	77.5	A	授業の中で、友達と関わり活動を取り入れ教育活動を行ったり、保護者に人権教育で行っていることを伝えたりした。児童にアンケートを行った結果、友達を大切にしている児童は99%であったが、自分を大切にすることというところでは、70%にとどまり、他者意識は育っているが、自己肯定感が低い児童が一定数いることが課題である。	今年度は、自己肯定感を高める手立てとして、活動の振り返りを行ったが、児童に振り返りの意義を十分に理解させることができず、自己肯定感を高めきれなかったと感じた。次年度は、振り返りの指導内容を精選し、児童がその日の学習内容と自分の頑張りを認められるようにしていく。	道徳授業地区公開講座では、「思いやり・親切」の学習をする中で、「親切にされるよりも、親切7する側になりたい。」という発言が出て、思いやりについてしっかりと学んでいた。また、先生が児童の意見をうまく引き出すことで、児童の自信につながっていた。また、児童に合った役割を付けることで、児童の自己有用感を高めることができていた。	4
	特別支援教育の推進	①校内委員会を月に少なくとも2回実施し、児童の実態把握に努め、教職員全体で共有を図る。 ②通常の学級担任と特別支援学級担任との交換授業の実施による教科指導、特別な支援に基づく個に応じた指導との相互理解を進める。 ③特別支援教育コーディネーターによる役割を明確にし、校内支援体制の充実を図るとともに具体的な支援策を実践できるようにする。	学校評価アンケートにおける特別支援教育における項目での7割が肯定的になること	80	64.3	76.4	B	特別支援コーディネーターが各学級の様子を見ることで、実態の把握をし、コーディネーターを中心として校内委員会を行い、個に応じた支援方法を検討し、全教員で確認することができた。 一部通常級の担任が特別支援学級で道徳等の授業を行った。特別支援学級担任が通常級での指導は行っていない。今後、実施予定である。	特別支援コーディネーターの役割を明確にし、校内支援体制をより充実させていくとともに、今までのように計画的に校内委員会を開催していく。 交換授業については、次年度までに計画を立て、行えるようにしていく。	特別支援学級の学習に向かう意欲は素晴らしいものがある。また、通常学級との交流や特別支援学級どうしの交流が盛んで、本校の児童は学年が上がることに特別支援学級やそこにいる児童への理解が深まり、心が成長している。	4
健やかな体の育成	体力の向上(中期)	①校内のOJT等により体育科の授業の充実を図る。 ②外遊びを励行し、持続力だけでなく、体力全般にわたって向上を図る。 ③持久走月間、体育集会等を設定し、体力向上に向けた全校的な取組を推進する。	体力調査によりB判定以上が6割を超えるようにする。	80	60.2	71.59	B	今年度は、タグラグビーのOJT研修を実施することができた。年間を通じて、もう少し多くの領域でOJT研修を実施していくことが課題である。中体みは外遊びを励行することができている。コロナ禍で、児童の体力も低下しているため引き続き実施していきたい。	昨年度は水泳、今年度はタグラグビーと限られた領域でしかOJTができていないので、多種多様な領域のOJTを行い、体育科の授業の充実を図っていく。 体育集会は、運動会に関わる内容を実施したため、大縄や鬼遊びなど体力向上に関わる内容も実施していることと良い。	体力を身に付けるためにただ走るのではなく、タグラグビーなどの種目を通して楽しみながら体力の向上に取り組んでいる点が良い。 昨年度の水泳の取り組みが基礎体力作りにつながっているのではないかと。基礎が身に付いているため、7月より達成値が伸びていると考える。	4
	2020オリンピック・パラリンピック教育のレガシーの継続(中期)	①校内における交流をさらに盛んにし、「障害者理解」を深める。 ②学級の係活動や委員会、さらに下級生のお世話などを通じて家族や人の役に立つことの喜びを伝え、ボランティアマインドを育てる。	交流やボランティア的活動における観察で、児童が自然に活動してればよい。	80	62.9	76.4	B	年間を通して、校内で特別支援学級との交流を実施することができた。 今年度も「落ち葉ボランティア」などの実施で、ボランティアマインドの醸成に努めた。	校内にとどまらず、近隣の特別支援学校との交流など交流の幅を広げていくと良い。 「卒業ボランティア」や下級生のお世話など、さらにいろいろな場面を設定して、ボランティア精神を磨いていく。	ボランティアの基礎は思いやり。思いやりの気持ちを大切に指導していくことが大切だと考える。 「落ち葉はきボランティア」など、児童が自分から取り組めるものを指導に取り入れると、楽しみながらボランティアに取り組むことができる。小学校だけでなく中学校でも体験できたり、家庭でもボランティアについて話し合うきっかけを投げかけていけるとよい。	4
※学校裁量	人権教育の一層の充実	①年間4回の授業研究を実施し、人権教育の充実を図る。 ②自分も人も大切にすることを児童の育成を進める。 ③人権課題に関する指導、個別的な視点の取組に力を入れ、偏見・差別を許さない心を育成する。 ④研究発表会を開催し、人権教育を他校への普及、啓発に努める。	人権教育アンケートにより評価	80	63.8	78.6	A	人権尊重教育推進校として年間を通して、研究授業の実施、校内環境整備、人権集会など人権教育の充実を図ることができた。また、道徳教育を柱として人権尊重の理念等について指導してきたことで、偏見・差別は許さない心を養うことができた。ただ、自分を大切にすることを児童の育成に課題が残った。	今後さらに教員が人権課題の理解を図り、人権課題に関する実践を積み重ねていく必要がある。そのため、研修会などを通じて、東京都の17の人権課題について理解を深めていく。そして、自分を大切にすることを児童の育成のために、人権教育年間指導計画をさらに改善し、継続的な実践を行っていきます。	人権尊重教育推進校として研究を重ね、教職員の人権感覚が磨かれた。また、児童同士に、互いのよさを見つけ、伝えるという意識が高まったと考える。 自分を大切にするという児童の育成については、完璧主義な面があるのかもしれない。学校や家庭で、自己肯定感が高まるようにさらなる声掛けが必要である。	4
	地域との深い連携を生かした教育活動を進める	①学校運営協議会における「教育支援部」の協力を仰ぎながら、地域の物的及び人的資源を活用した教育活動を計画的に進める。 ②第三中校区として、小中連携を進めながら、地域における交流体験、交流学習を実施する。	学校評価における地域との連携の項目で、7割が肯定的となること	80	59.8	74.5	B	今年度は、国立感染症研究所の出前授業や水田学習報告会を実施し、2月には総合防災訓練を実施する。 また、三中校区の連携では、今年度ふれあいフェスティバルは中止になったが、中学校の様子を伝えるに中学生との交流をしたり、積み木作りで中学生がお手伝いに来たりするなど様々な交流を行うことができた。	各教科の年間指導計画を見直しして単元によって地域の方と連携し、ゲストティーチャーを呼び込むなど有効活用できるように計画を立てる。今年度はX(旧Twitter)やtetoruなど様々な発信ツールを使って、地域や保護者に発信することができたので、来年度も引き続き行っていく。	地域の物的、人的資源を活用した教育活動が充実していた。総合防災訓練では、内容が、さらに体験的で、流れもスムーズであった。 交流については、三中校区の交流が盛んなので、今後は、幼稚園、保育園との交流を考えてほしい。たとえば、1年生による学校案内を行うなどはどうか。	3
	「誰もがリーダー」主体的に仕事に取り組む人材が育つ「チーム雷塚」の創成	①任せ、見守り、育てることで、自ら考え、すすんで実践していく主体的な教職員を育てる。 ②教え、教わる協働的な職員室の雰囲気作りを行う。	・教員及び保護者への学校評価アンケートから、職場への満足感や教職員の外部への対応などの項目で8割の肯定的意見。	80	63.6	76.6	A	学校自己評価アンケートから、職場での満足感が目標値の8割近くまでになった。教職員が互いに連携したり、助け合ったりする様子が多く見られた。また、ベテラン教員や若手教員関係なく、声を掛け合い、明るい雰囲気職員室に見られた。	担当分掌の職務を全うするのはもちろんだが、それ以外の職務でも気に掛けたり、声掛けをしたりするなど、主体的に行動できる教職員や組織として柔軟に対応できるような教職員をさらに育成していく。	教員同士の関係が良好であるのは何よりである。また、特別支援学級があることで、校内支援委員会も充実し、通常級の教員が支援学級の教員に学ぶことも多...	4

【達成度】 = 【達成値】 / 【目標値】

【評価】 A : 8割以上 → 目標達成とみなし新たな目標設定 B : 8割未満5割以上 → 8割を超えるまで継続実施 C : 5割未満 → 目標の見直し

平均値 **3.90991**